様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１７６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１７５０６

研究課題名（和文）精神科訪問看護師が実践する個人向けメタ認知トレーニングの効果検証

研究課題名（英文）Verification of effectiveness of meta-cognitive training for individuals practiced by psychiatric visiting nurses

研究代表者
田上　博喜（Tanoue, Hiroki）

宮崎大学・医学部・助教

研究者番号：００７２９２４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、精神看護におけるメタ認知トレーニングの提供拡大に向け、精神科訪問看護で実施するメタ認知トレーニングの有用性を検討した。その結果、訪問看護で提供するメタ認知トレーニングは、当事者の苦痛となりやすい陽性症状や抑うつ症状に対して有用であることが示唆された。さらに、精神科訪問看護における心理社会的の実施に当たっては訪問看護ならではの困難が想定され、精神科訪問看護師へのインタビューを通してその詳細を検討した結果、技術習得や対象者への適用することの困難があることが明らかとなった。さらなるメタ認知トレーニングの提供拡大に向け、課題克服に向けた支援が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本課題における一連の研究の結果から、精神科訪問看護における看護師が実施するメタ認知トレーニングは、統合失調症の陽性症状や生活の質（QOL）への有用性が明らかとなった。さらにインタビューの結果からは、精神看護における統合失調症への有効な介入方法としてのメタ認知トレーニングや認知行動療法といった心理社会的支援のさらなる拡大に向けた課題点が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study examined the usefulness of metacognitive training provided in psychiatric home nursing with the aim of expanding the provision of metacognitive training in psychiatric nursing. The results suggest that metacognitive training provided in home nursing is useful for positive symptoms and depressive symptoms that tend to cause distress to the patients. In addition, we examined the details through interviews with visiting psychiatric nurses, and found that there were difficulties in acquiring the skills and applying them to the target patients. Support is needed to overcome these difficulties in order to further expand the provision of metacognitive training.

Translated with www.DeepL.com/Translator (free version)

研究分野：精神看護学

キーワード：メタ認知トレーニング　精神看護　精神科訪問看護

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近年、国内における精神障害者に対する地域移行支援特別対策事業等により、退院支援や地域生活支援を目的に支援を行い、精神障害者の地域移行・地域定着については一定の成果を上げている（厚労省, 2013）。また、受療中断者や自らの意思では受診が困難な精神障害者には、地域生活の維持のためのきめ細やかな訪問や相談対応を行うことが必要とされており、本人の意向に寄り添う医療と生活支援を両立させるためには、精神科医・保健師・看護師等の保健医療スタッフと、精神保健福祉士等の福祉スタッフとが、「多職種チーム」として、それぞれの技術及び価値観から多面的な視野のもとに共同して支援を行うことが極めて有効である。このような背景の中、精神科訪問看護は精神障害者に対する地域ケア施策において重要な役割を担っており、その効果については、精神科病棟への再入院の防止と在院日数の減少に影響を与えることが報告された（萱間ら, 2008）。しかし、精神科訪問看護で提供されるケアは、精神症状のモニタリングによる早期の変化把握や、服薬支援、日常生活支援、対人関係調整、家族支援、社会資源の活用、関係者の調整など多岐にわたり（瀬戸屋ら, 2008）、精神科訪問看護実践は、精神症状に応じた対応の困難さ、精神科訪問看護における専門性の不足等、個々の援助に関する困難さや、精神科訪問看護向けの研修等の専門性を高める機会が限られることや、専門職種間連携の困難さなど様々な課題があり（新井ら, 2011）、現在も有効な訪問看護実践について模索が続いている。以上の地域ケアの課題や精神科訪問看護の困難を解決するための方策として、我々は認知行動療法を基盤とした看護援助が地域に暮らす精神障害者の生活を援助し、生活上の困難に対処できる力と活力を与える基盤となると考え、2014 年に、訪問看護師が認知行動療法を実践するための「精神科訪問看護師のための認知行動療法研修プログラム」を作成し、宮崎県、福岡県の精神科訪問看護師を対象に研修を実施した（2015～2016 年）。その結果、参加者からは統合失調症者への訪問に関して有効な認知行動療法的介入方法をさらに学びたいとの要望が多く聞かれ、統合失調症者への有効なケア方法に関するニーズが示された。さらに、精神科訪問看護は、訪問回数や時間が決まっており治療的構造化が容易であることや、生活に密着したケアによりセルフマネジメント能力の向上の促進と変化の測定が可能であることから、精神科訪問看護師が認知行動療法をはじめとした心理社会的支援を行うことは、精神障害者が生活に必要なスキルを獲得を促す支援へのアクセス改善に貢献すると考えた。

一方、統合失調症の抗精神病薬治療はいまだに統合失調症のための治療選択の代表であるが、症状に関する客観的な影響力は中等度の効果量にとどまり、少なくとも 50%の患者は治療の途中で治療中断し（Lacro et al. 2002）、補完的な治療が求められている。そのような中、近年認知行動療法が統合失調症への介入として有効であることが示され、統合失調症に特徴的な「結論への飛躍（合理的な理由を考慮せずに、突飛な答えに至ってしまう）」などの認知のバイアス（歪み）が、陽性症状、特に妄想と関連しているとの研究結果が蓄積されてきた。Moritz らによって開発されたメタ認知トレーニング（Metacognitive Training：MCT）はこのような認知バイアスを標的にしたプログラムであり、認知行動療法や心理教育、認知リハビリテーションの混成物である。MCT は構造化されたプログラムであり、特別な用具を必要とせず、当事者が楽しく参加でき、 個人の症状を取り扱わないため、信頼関係を損ないにくい。また、モジュールが標準化されており、補完的な治療の 1 つとして、訓練すれば精神科医や心理職以外の専門職種も実施が可能であるという「使い勝手の良さ」が特徴である（石垣ら, 2016）。MCT は、その利用可能性と効果から、標準的な精神科治療を補完するものとして発展している。MCT は世界各国で翻訳され適応が進められており、2011 年に開発された個人向け MCT（MCT+）も 2014 年に日本語へ翻訳され、集団療法だけでなく個人への介入も可能になり、この個人向け MCT は精神科訪問看護に親和性が高いと考えた。精神科訪問看護は統合失調症者個々との関わりの機会が多く、訪問の機会が定期的にあることや、信頼関係が構築されていることから、MCT+を実践しやすく、統合失調症者の QOL の向上だけでなく、精神科訪問看護師の統合失調症者への介入スキルに関するニーズや訪問の困難感の軽減につながると考えた。

２．研究の目的

本研究では、精神科訪問看護へ MCT+を導入したうえで、実際に統合失調症を持つ訪問看護利用者へ提供し、その効果を検討することを目的とした。また、精神科訪問看護における MCT+の実施に当たり、訪問看護ならではの困難が想定されたため、心理社会的介入を行う精神科訪問看護師へのインタビューを通してその詳細を検討した。

３．研究の方法

研究①精神科訪問看護で提供するメタ認知トレーニングの有用性に関する研究

訪問看護ステーションへ研修を通して MCT+を導入し、研究開始時には日常的に利用者へ実施している状況であった。MCT +は高度に構造化されており、通常、週に 1 回 30-50 分の面接

を全 11 回行うものである。統合失調症による精神科訪問看護利用者について、研究協力施設である訪問看護ステーションでリクルートを行った。MCT +を受けてみたいという希望のある利用者に対して、主任研究者が訪問に同行し、研究の説明と研究参加の同意書を取得した。MCT+実施前·5 モジュール終了後、MCT+終了時 （20 週前後となる）、終了 4 週後のフォローアップの全 4 回のデータ収集を実施した。主観的な評価については直筆の質問紙の記入を求めた（生活の質; EQ-5D-5L、認知的洞察; BCIS-J、抑うつ症状; BDI-II）。また、トレーニングを受けた評価者が客観的評価を行った（陽性症状; PANSS 陽性スコア、全体的機能; GAF）。
〇個人向けメタ認知トレーニング（MCT+）の内容:「原因帰属のありかた」、「誤った記憶への過信」、「結論への飛躍」、「心の理論の欠如」など、統合失調症の症状、特に幻覚や妄想の維持に関与すると考えられている代表的な認知バイアスをターゲットに、11 のモジュールで構成されている。1 つのモジュールを実施するのに必要な時間は 30 分から 60 分程度、1-2 週に 1 回、20 週間前後で完結する。全てのモジュールの構造は共通しており、 ①認知バイアスは誰にでも生じることを教育する「ノーマライゼーション」の部分、②認知バイアスの存在を実体験する「エクササイズ」の部分、③症状の増悪、症状と認知バイアスの関連について検討する「ディスカッション」の部分で構成されている。

研究②精神科訪問看護師が心理社会的介入を行う上での困難についてのインタビュー研究
　統合失調症をもつ訪問看護の利用者へ認知行動療法を提供した経験がある訪問看護師を対象者に、精神科訪問看護師が心理社会的介入を行う上での困難についての半構造化インタビューを行い、質的記述的分析方法を用いて分析した。方法論および結果の提示にあたっては、「質的研究報告のための統合基準（Consolidated criteria for reporting qualitative research: COREQ）」に準拠した。対象施設は、訪問看護の中で MCT をはじめとした心理社会的介入を試みている 4 か所を便宜的に抽出した。さらに、これらの施設で MCT+を提供した経験がある訪問看護師 6 名を本研究の対象者とした。主な質問項目は、1）統合失調症をもつ利用者に対して実施した心理社会的介入の内容、2）統合失調症をもつ利用者に対してリハビリテーションをはじめとした心理社会的介入を行う上で生じた困難とした。また、実施上の困難を解決するためのアイデアを得るために、3）訪問看護の中で低強度認知行動療法を実施するために必要なサポートについても、補足的に質問した。インタビュー内容は対象者の許可を得て録音し、 逐語録を作成した上で質的記述的分析方法を用いて分析した。抽出したカテゴリー、サブカテゴリー、逐語録から抽出した語り、逐語録の一貫性·妥当性について、研究者間で解釈についてコンセンサスを得た。

４．研究成果

研究①精神科訪問看護で提供するメタ認知トレーニングの有用性に関する研究
　統合失調症による訪問看護利用者 13 名がリクルートされ、2 名は除外となり（理由: 訪問機会が安定していないため）、11 名が研究に登録された。参加したセッションの平均数は 16.89（SD=4.65）で、11 名中 6 人の参加者が全 11 モジュールをすべて受けた（5 名が脱落）。脱落の理由としては、MCT+の内容が難しかったため（n=2）、訪問について MCT+以外の訪問目的があり介入に時間を割けなかった（n=3）ことが挙げられた。参加者個別の結果としては、完遂した 6 名中 5 名は、開始時から終結時にかけて陽性症状および抑うつ症状が改善した（それぞれのスコア改善の平均値=5.72、4.64）。以上より、社会認知機能のリハビリテーションとして実施された MCT+は、統合失調症の認知機能への改善を示す結果は得られなかったが、当事者の苦痛となりやすい陽性症状や抑うつ症状に対して有用であることが示唆された。本研究では参加者が少なく、心理社会的介入を実施できる訪問看護ステーションも限定されることから、得られた結果を一般化することはできないが、 精神科訪問看護における認知リハビリテーションの潜在的な有用性を示唆するものである。また、訪問の限られた機会·時間の大半を心理社会的介入に費やすことは業務上難しく、MCT+に時間を割くことができず脱落となるケースが散見された。これら提供上の課題の克服や、非常事態下での継続的な支援に向けて、提供方法の工夫や ICT の活用などが必要であると考える。

研究②精神科訪問看護師が心理社会的介入を行う上での困難についてのインタビュー研究
　インタビューを受けた対象者は女性が 3 名、男性が 3 名であり、年齢は 30~60 歳代の範囲であった。精神科領域での訪問看護師としての経験年数は平均 9.4 年（標準偏差[standard deviation:SD]= 5.6）、精神科領域での看護師としての経験年数は平均 16.5 年（SD=5.8）であった。また、心理社会的介入の実施経験年数の範囲は 1.0~3.2 年であった。インタビューの結果、精神科訪問看護の利用者に対して、訪問看護師が認知リハビリテー ションやその他心理社会的介入の実施にあたり認識した困難を表す 3 つのカテゴリーが抽出され、【低強度認知行動療法を訪問看護師が学び、習得する上での困難】や【低強度認知行動療法を訪問看護師が利用者に適用する上での困難】を感じており、また、【低強度認知行動療法の提供を困難にする訪問看護特有の機能と構造】を認識していることが明らかとなった。これらの困難に対処し、訪問看護師による統合失調症をもつ人への心理社会的介入を普及させるためには、実施マニュアルの理解を促進するための改良、スーパーバイザーに継続して相談できる環境づくり、診療報酬の算定要件や点数の見直しなどが必要であることが考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Tanoue Hiroki、Yoshinaga Naoki、Hayashi Yuta、Ishikawa Ryotaro、Ishigaki Takuma、Ishida Yasushi	４．巻 18
２．論文標題 Clinical effectiveness of metacognitive training as a transdiagnostic program in routine clinical settings: A prospective, multicenter, single‐group study	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Japan Journal of Nursing Science	６．最初と最後の頁 e12389
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jjns.12389	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Tanoue Hiroki、Hayashi Yuta、Shikuri Yuki、Yoshinaga Naoki	４．巻 Advance Publication
２．論文標題 Cognitive behavioural therapy for mood and anxiety disorders delivered by mental health nurses: Outcomes and predictors of response in a real-world outpatient care setting	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Journal of International Nursing Research	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.53044/jinr.2022-0023	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yoshinaga Naoki、Tanoue Hiroki、Hayashi Yuta	４．巻 40
２．論文標題 Naturalistic outcome of nurse-led psychological therapy for mental disorders in routine outpatient care: A retrospective chart review	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Archives of Psychiatric Nursing	６．最初と最後の頁 43～49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.apnu.2022.04.008	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Shikuri Yuki、Tanoue Hiroki、Imai Hissei、Nakamura Hideki、Yamaguchi Fumitake、Goto Taichi、Kido Yoshifumi、Tajika Aran、Sawada Hirotake、Ishida Yasushi、Yoshinaga Naoki	４．巻 12
２．論文標題 Psychosocial interventions for community-dwelling individuals with schizophrenia: study protocol for a systematic review and meta-analysis	５．発行年 2022年
３．雑誌名 BMJ Open	６．最初と最後の頁 e057286～e057286
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1136/bmjopen-2021-057286	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Tanoue Hiroki、Yoshinaga Naoki	4．巻 1
2．論文標題 Schizophrenia in Japan and cognitive behavioral therapy	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Handbook of Cognitive Behavioral Therapy by Disorder: Case Studies and Application for Adult	6．最初と最後の頁 377～385
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/B978-0-323-85726-0.00002-8	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 田上博喜，吉永尚紀，林佑太
2．発表標題 日常臨床でのアウトカムから見た看護師による認知行動療法の効果
3．学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
4．発表年 2021年

1．発表者名 Tanoue H, Yoshinaga N, Hayashi Y, Funahashi H, Ishigaki T, Ishida Y
2．発表標題 Metacognitive training (MCT) in a Routine Open Group Setting in Japan: A Preliminary, Multi-Center, Single-Group Study
3．学会等名 9th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies (WCBCT)（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Hiroki Tanoue, Naoki Yoshinaga, Yuta Hayashi, Takuma Ishigaki, Hideki Funahashi, Yasushi Ishida
2．発表標題 Metacognitive training (MCT) in a routine open group setting in Japan: a preliminary, multi-center, single-group study
3．学会等名 9th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 田上博喜，吉永尚紀，船橋英樹，石田康
２．発表標題 統合失調症へのメタ認知トレーニングの実践とその効果
３．学会等名 第18回精神疾患と認知機能研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 石垣 琢麿	４．発行年 2022年
２．出版社 星和書店	５．総ページ数 312
３．書名 メタ認知トレーニングをはじめよう！	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Individualized Metacognitive Therapy (MCT+)
https://clinical-neuropsychology.de/mct-plus-psychosis-japanese/
Individualized Metacognitive Therapy for Psychosis
https://clinical-neuropsychology.de/mct-plus-psychosis-japanese/
Individualized Metacognitive Therapy for Psychosis
https://clinical-neuropsychology.de/metacognitive-therapy-plus-individualized-mct-for-psychosis/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関